

機関番号：32692

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20730356

研究課題名 (和文) サブカルチャー集団による地域社会への参加に関する民族誌的研究

研究課題名 (英文) An Ethnography of local community participation through subculture

研究代表者

大山 昌彦 (OHYAMA MASAHIKO)

東京工科大学・メディア学部・准教授

研究者番号：40329173

研究成果の概要 (和文)：本研究は、脱地域的な性格を持つサブカルチャーに対する関心の共有を媒介としたネットワークが、地域社会への参加の契機を産み出す様相を明らかにするものであった。従来の社会的紐帯が崩壊しながらも生活圏がある程度共通することから、そうしたネットワークが情緒的な関係性をもたらすだけでなく、生活上必要な社会関係資本を提供すること、またサブカルチャー集団は、地域に対する愛着を媒介として他者との交流を産み出し、地域内にさらに広範なネットワークを構築する可能性を持つことを指摘した。

研究成果の概要 (英文)：This study aims to appear how subculture function for local community participation. Through this ethnographical research on *rokkunrooru*, some kind of street performance, I show that this subcultural network enhances social ties in their live circle, functions as social and voluntary safety net and makes the members associate with other people. Consequently subculture and its network promote local community participation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：地域社会学, 文化社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：地域社会, 公共空間, 社会参加, サブカルチャー集団

1. 研究開始当初の背景

近年、地域社会の崩壊とそれに伴う地域における人間関係の希薄化が多くの研究から指摘されている。『平成19年版国民生活白書2007』によれば、地域における人間関係の希薄化に加え、地域活動の参加者も減少している。また白書では、特に若年層の地域社会からの孤立化が顕著であることを指摘してい

る。その一方で若年層を中心に、ポピュラー・カルチャー、サブカルチャーなどの特定の趣味や関心を媒介として、地域を越えたネットワークを形成し、濃厚な関係性を構築していることも従来の研究で指摘されている。

2. 研究の目的

ポピュラー・カルチャーやサブカルチャー

は、主としてマスメディアや商品文化によって媒介されるため、脱地域的文化としての性格を強く持つが、一方では、具体的な活動場所が必要とされることで、対面的にネットワークが形成されると地域化する可能性を合わせ持つ。

本研究は、その脱地域的な性格とは裏腹に、ポピュラー・カルチャー、中でもサブカルチャーに対する関心の共有を媒介としたネットワークが、地域社会への参加の契機となる様態を明らかにするものである。

本研究の対象となるのは、研究代表者が1997年から継続的に調査を行ってきた、茨城県中央部の「ロックンロール」と呼ばれる、サブカルチャー的な路上のダンスのパフォーマンス活動を行う集団である。

3. 研究の方法

研究のための資料収集は、a) 文献調査、b) 現地調査の両面から実施する。文献調査においては、雑誌記事と、地方メディア（茨城新聞）と各種統計資料を対象にする。雑誌記事では、ロックンロールの形成プロセスを地方紙では、ロックンロール関連の記事を収集し、当該地域における一般的な理解を検討する。また統計資料では、ロックンロールの参加者の多くが従事する、茨城県中央部における建築関係の産業構造の変化を背景として明らかにしていった。現地調査では、一つめに、ロックンロール・チームの活動の観察とメンバーの活動に関する意識とこれまでの活動参加への経緯、そして現在の労働状況に関して聴取を通じて資料を収集し、資料の分析と解釈から、メンバーの属性の共通性と価値および行動原則を抽出する。二つめには、地域社会の対応に関して、祭事の実行委員、商店会、警察などから、ロックンロール活動に対する意識を聴取し、その対応の相違点を明らかにしていく。

茨城県中央部の主要なロックンロール・チームと実行委員会のメンバーとはすでにある程度ラポールが構築されているので、インフォーマントを通じて別のインフォーマントを紹介していただくスノーボール・サンプリングを実施する。また、スノーボール・サンプリングを実施することで、対象者のネットワークの様相を明らかにできると思われる。

4. 研究成果

(1) 文献調査では公共空間でダンスを行うロックンロールと呼ばれるサブカルチャーの形成に関して、雑誌や新聞の分析から明らかにした。1970年代後半に誕生したロックンロールは、本格的な消費社会を迎えた日本に

において、若年層におけるサブカルチャーが学歴をファクターとして分化しつつある状況を反映していた。ファッション、音楽などロックンロールを形成する多様な商品化された資材は、学歴という正統な文化資本を持たない非エリート層によって市場に供給されたものであった。さらに起業家たちの社会的な成功がマスメディアを通じてオルタナティブなサクセスストーリーとして公表されることによって、非エリートの若年層に支持された結果、そうした層をターゲットとした市場が形成された。そうした商品と情報をお互いにブリコラージュすることによってロックンロールというサブカルチャーは形成されたことを明らかにした。

さらに1980年代初頭となると、「ツッパリ」と呼ばれた反学校的な非エリート層のサブカルチャーがタレントやグッズを通じて商品化される過程において、ロックンロールはツッパリのアイコンの一つとして流用された。そのため1980年代初頭のいわゆる「ツッパリ・ブーム期」において、ロックンロールの主体であるローラーが少年少女向けの雑誌に頻繁に登場した結果、ロックンロールは全国に拡大していった。1980年代後半ブームの衰退とともに、全国的に拡大したロックンロールは一部の地域を残して消滅していったプロセスを明らかにした。この成果は「ケンカから格闘技へ暴力性の資本化に関する一考察」および「基地文化の消米化」で発表した。

(2) フィールドワークではロックンロールを行う主体であるローラーの活動とその意味づけ、そしてネットワークの変化を調査した。対象地域である茨城県中央部は、「ツッパリ・ブーム」以降もロックンロールが引き続き行われてきた。その主体は居住地域を基盤として形成される暴走族をはじめとした10代後半の若年層の逸脱的な少年グループであった。ロックンロールが「不良」になるためのいわば条件と位置づけられ、それを義務的に学習するプロセスが不良集団に組み込まれることによって、地域的に継承されてきた様相を明らかにした。この成果は「暴走族文化の継承」に発表した。

茨城県中央部における従来の動向に対して、暴走族など逸脱的な少年グループの義務的な活動から趣味と位置づけ直すことでロックンロールを切り離し、パフォーマンスのみに特化したグループが、成人男性を中心に1990年代初頭に結成されはじめ、2000年前半以降増加している状況が確認された。

成人系のチームの特色として10代から40代までと年齢層が拡大しつつあること、従来ごくわずかにしか存在しなかった女性のローラーが増加したこと、またメンバーの出身地域が居住地域に限定されていない広範なものへと、世代と性別と地域を超えたネットワークが形成されることが確認された。各チームが暴走族時代と比較すると広範囲のネットワークを形成しているのは、メンバーが就業、結婚などライフ・ステージの変化とともに拡大した生活圏内に張り巡らされた多様なネットワークと重なり合っているためであった。地元の先輩後輩のような地縁、夫婦や親子など親族の血縁、同じ会社や現場をともにする人々の仕事縁、スポーツなどのロックンロール以外の趣味縁が複雑に絡み合っている状況が観察された。そのためロックンロールを媒介としたネットワークは、生活圏に張り巡らされた既存のネットワークを外延しつつより強化する性格であることを明らかにした。

またこうしたロックンロールの地域的な変化によって、従来と異なるサブカルチャーの伝達とメンバー参加の様態が見られるようになった。従来ロックンロールは、暴走族を中心とした地元の不良グループへの周辺から加入を契機とした同世代の集団内で伝達されてきたが、成人系のチームにおいては、10代後半の若年層の参加は、親子、またはそこから派生し子供の友人関係がその契機となっているため、家族関係がサブカルチャーの伝達において重要な機能を果たしていることが確認された。さらにロックンロールが趣味と位置づけられたことから、自分の好みのスタイルに応じて自由にチームを各自が選択することが可能となり、チームとメンバーの関係はより流動化しつつある状況が観察された。この成果は「脱若者化・地域化するサブカルチャー」にて発表した。

成人系のチームはロックンロールを基盤としてそのネットワークを拡大しつつある。成人系チームの統括団体として2007年に結成された「水戸・ロックンロール・オーナーズ・クラブ」は、チーム間の交流を目的としたイベントを年に数回開催している。チーム間の交流のみならず、類似する音楽を愛好しながらも、従来は関係性が希薄であった、ライブハウスでのイベントを企画するイベントやバンドなど関連する他集団まで拡大し、ロックンロールを媒介としたネットワークが県内まで広域化する様子が観察された。

しかし増加傾向にあった成人系のチームの中には、活動に困難を来す状況にあることが確認された。こうしたチームは主にメンバーが同世代の同じ地元の出身者で結成されていることが特徴的であった。この理由の一つは、仕事が多忙なため活動とチームの維持が困難となるなど、活動自体の不活性化であり、二つ目は、少年時代に形成された地元の「先輩後輩」という権力関係が少なからず影響し、必ずしも若いメンバーが望まないスタイルや活動方針が年長のメンバーによって決められることに対する反発があった。特に後者の理由は、ロックンロールが趣味と位置づけられたことによって、もはや活動をめぐる意志決定が上下関係でなされるものではなくになっている現状が確認された。

拡大するロックンロールのネットワークは、性格の異なるネットワークが重層化されていることから分かるように、部分的にはあるが、雇用や仕事に関するセーフティネットとしての機能を果たしていることが明らかとなった。親しい関係にあるローラー間においては、仕事の発注や受注、雇用の受け入れ、仕事やキャリア関係に関する情報交換などが頻繁に行われていた。趣味のネットワークにおける関係性を緊密化し、仕事の局面においても機能するためには、ロックンロールという同じ趣味を共有するだけでは不十分であり、活動に対する参与の積極性と熱意が重要視されていた。というのは熱意の有無がより深い情緒的な関係性と信頼感を産み出す条件としてローラーが考えているためである。このことから、情緒性を基盤とした趣味のネットワークが、道具的な性格を帯びる転換点が明らかになった。こうした関係性には、比較的安定した雇用条件にあり、立场上仕事を斡旋できる30代後半のローラーが、より雇用が不安定な若年層のメンバーを援助する側面が観察された。特に、下請けの職人、なかでも「一人親方」のような個人で仕事を受注する若年層の労働者にとっては、ロックンロールのネットワークは、公共事業の減少に伴いそれまで存在した仕事の受注体制が崩壊しつつある状況において、仕事を得るためのネットワークとしての意味も兼ね備えている。

(3) またフィールドワークではローラーと外部の他者との関係性を明らかにするため、数多くのローラーがパフォーマンスを行う「黄門祭り」の主催者である水戸市観光協会と地元商店会への聞き取り調査を行った。主催者側は、かつてロックンロールの主体が暴

走族であった時期、祭りの進行の妨害や警察とのトラブルを引き起こす存在としてローラーを敵視していた一方、没交渉的であり対策にも消極的であったが、観光協会の会長が交代したことを機にローラー対策に着手した。この動向に対して「水戸・ロックンロール・オーナーズ・クラブ」は、ローラー側の意向をまとめ明文化し主催者側に提出した。その結果祭りへの参加をめぐって両者の交渉が行われるようになった。交渉が継続される中で、ローラーと主催者は相互理解を深め、共同で祭りのパトロールの実施など協調関係を築きつつあることが確認された。この背景には、ローラーのパフォーマンスが集客効果を持つという主催者側のメリットが認識されるようになったこと、そして祭りが開催される水戸市の中心街という場に対する愛着を両者が持っていることを相互に確認したことが挙げられる。そうした実績を背景にいくつかのチームは、地域の様々なイベントでの出演を依頼されることもある。事実、主催者側にはかつてのロックンロールの記憶から強硬な反対派も存在しているが、ローラーと主催者との関係性のポジティブな側面に注目すれば、場所に対する愛着の共有が、立場と利害の異なる人々との関係性を産み出し、衰退の一途をたどる地方都市の中心街が再生していく一つの出発点となると考えられる。

本研究の結果から、従来の社会的紐帯が崩壊しながらも生活圏がある程度共通する地方社会において、サブカルチャーを媒介した人間関係が情緒的な関係性をもたらすだけでなく、生活する上で必要とされる社会関係資本を提供すること、またサブカルチャー集団は、地域に対する愛着を媒介として他者との交流を産み出し、地域内にさらに広範なネットワークを構築する可能性を持つことが指摘できた。以上の結果から、サブカルチャーは、地域社会への参加に関して重要なチャンネルとして機能する可能性を持っているといえるだろう。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

①大山昌彦, 2010. 11. 06, 「グローバリゼーションと都市変容IV——都市空間における公共性の問題」, 日本社会学会(第83回)(愛知県, 名古屋大学)

②大山昌彦, 2009. 06. 27, 「暴走族・社会人・

ロックンローラー—茨城県中央部における「ロックンロール」とその変容」, 早稲田大学文化社会学研究所(東京都, 早稲田大学)(招待講演).

〔図書〕(計5件)

①大山昌彦, 2011, 「歩行者天国のゆくえ」, 遠藤薫編著, 『グローバリゼーションと都市変容』, 世界思想社.(印刷中)

②大山昌彦, 2011, 「脱若者化・地域化するサブカルチャー」, 浅野智彦ら編著『若者の現代3 文化』, 日本図書センター.(印刷中)

③大山昌彦, 2011, 「基地文化の消米化」, 難波功士編著『戦争が産み出す社会—戦後空間と米軍基地』, 新曜社.(印刷中)

④大山昌彦, 2010, 「『ヤンキー』からプロボクサーへ—文化装置としての格闘技」, 岡井崇之編著, 『レススル・カルチャー』, 風塵社, pp.151-182

⑤大山昌彦, 2008, 「暴走族文化の継承」, 五十嵐太郎編著, 『ヤンキー文化論序説』, 河出書房新社, pp.185-201

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大山 昌彦 (OHYAMA MASAHIKO)

東京工科大学・メディア学部・准教授

研究者番号: 40329173